

## 信頼構築へ 対話重ね



春日井のヤングケアラー

ヤングケアラーの言葉は広まりつつあるが、「家族の中でケアをしている模範的な『えらい子』となってしまっている」。この危機感を募らせるのは日本福祉大社会学部野尻紀恵教授。献身的な美談などではなく、実際はネグレクト(育児放棄)や虐待だ。

野尻教授は、家族の問題でも行政や支援者が介入する社会だということを知ってもらう必要があり、周囲も理解する必要があると訴える。せつかくヤングケアラー支援の制度があったとしても、「身内を見捨ててしまつてはいないか」と固定観念に縛られていては、支援を求める声を上げられない。



市はこれまで支援者向けの研修や、専門職のヤングケアラーコーディネーターが対応する「子ども相談窓口」を3日間開くなどしてきた。昨年度の新規相談は12人。多くは高校生からだった。

### 支援現場の声



大人のほく見えるヤングケアラーを抱える人間関係の問題などについて語る野尻教授。美浜町の日本福祉大美浜キャンパスで子どもの発達だけでなく、医療や介護に詳しい大人がヤングケアラーの支援に必要なと話す岩月さん。春日井市篠木町で

市の取り組みについて、野尻教授は寄せられた相談件数の多さから評価する。「春日井のスクールソーシャルワーカー(SSW)は学校からの信頼も厚い。関係機関と情報共有して、障害福祉や生活保護、医療分野と連携している」と話す。

一方、SSW自体が少なく「中学校区に1人いれば実態を把握できる。先生以外の大人に子どもが話しかけられる雰囲気をつくれる」とも指摘。相談窓口のコーディネーターを現在の1人から増員することや、

多世代交流型のサロンで相談できそうな大人と出会う場所づくりなども提案した。

ヤングケアラーは、本来愛護される子どもが、ケアをして愛を与える側になっている。ケアの見返りにほめられ、自分に役割があると考えるようになる。愛されることを知らず、甘えられずに、健全な人間関係の築き方が身につかない。

その境遇ゆえに大人びて見え、「大丈夫」と言っていると氣丈に振る舞う子どもが多い。支援には当事者との信頼構築が不可欠で、対話を重ねて適切な距離感を確認することが大切と説く。

この点で、春日井市の家族介護者支援のNPO法人「てとりん」の岩月万季代さん(36)も同じ考えを示す。つらい思いを抱え込む当事者の気持ちを踏まえ、時間をかけて「何でも話して良いんだよ」と関係を築き、ケアを受ける側にも理解を求めてきた。

「子どもの発達だけでなく、医療や介護のことを分かる専門家が子どもの状況や気持ちをくみ取り、支援の選択肢を示すこと」が必要と語った。

野尻教授は今、家族に向き合うヤングケアラーにメッセージを語った。「家族を大事に思う気持ちと、ケアを1人で担うことは違います。家族が大事だから自分がやるのではなく、家族が大事だからこそ、人に助けを求める選択肢があることを知ってほしい」